

[Hondaの交通安全情報紙]

SJ

Since1971

SJ ホームページは

●編集室：本田技研工業株式会社 安全運転普及本部内
〒107-8556 東京都港区南青山2-1-1
TEL 03 (5412) 1736 <http://www.honda.co.jp/safetyinfo/>
●編集人：吉田宏樹

※ご不明な点がございましたら、下記までお問い合わせください。
(株)アストクリエイティブ
安全運転普及本部係
TEL 03 (5439) 1191
E-mail: sj-mail@spirit.honda.co.jp



Safety for Everyone

Honda はすべての人の交通安全を願い活動しています。

特集
子どもへの交通安全教育

2016
2・3
February・March

NO.476

CONTENTS

- P1 特集：子どもへの交通安全教育
子どもの安全意識を育てるための取組み
- P4 教育最前線 / Honda 移送安全運転プログラム
- P5 TOPICS ① / 2015トラフィックセーフティ・フォーラム in 埼玉
TOPICS ② / 沖縄県・教習指導員二輪車安全運転競技大会
TOPICS ③ / 2015年 Honda 安全運転普及本部 年末ご挨拶会
- P6 FRONT LINE / 女性が運転する軽乗用車の後席同乗者のシートベルト着用状況を調査
- P7 危険予測トレーニング (KYT) / 信号機のない横断歩道に近づいた時 (四輪車編)
SJ クイズ
指導者ファイル / (一財)長崎県交通安全協会 (諫早市交通安全協会)・交通安全指導員の皆さん
- P8 SAFETY FOCUS / 群馬県高崎市



Honda Cars 大分の女性スタッフによる「あやとりい ひよこ編」を活用した交通安全教育

子どもの安全意識を育てるための取組み

ホンダが開発した幼児向け交通安全教育プログラム「あやとりい ひよこ編」(以下、あやとりい)は、安全確認の基本となる「止まる」「観る」の必要性を子どもたちにわかりやすく伝えることができる、既に多くの地域指導者に活用されている。そして昨年、交通安全活動に積極的に取り組む四輪販売会社(ホンダカーズ)に「あやとりい」と、その指導ノウハウを伝える、四輪販売会社を通じて地域に密着した交通安全活動を進めている。

ホンダカーズ大分(本社・大分県大分市)は昨年、本社の女性スタッフ3名を「あやとりい」の指導者として養成。10月より、その女性スタッフたちが全11拠点を回り、シヨールームへ来店する子どもへの交通安全教室を実施している。

子どもへの交通安全教育に取り組む
四輪販売会社

4月になると多くの子どもたちが新たに通学・通園を始める。近年、子ども(12歳以下)の交通事故死傷者数は減少傾向にある。しかし、2014年は約3万5000人と、いまだに多くの子どもが交通事故で死傷している。少子高齢化が進む中、次世代を担う子どもたちを守ることは重要な課題である。

新入学・入園シーズンを控え、Hondaは地域と一体となった交通安全普及活動を支援することが必要であると考えている。



「あやとりい教室」の指導者役を務めるHonda Cars 大分・企画業務課の工藤はるみさん(写真左)、足立霧名さん(写真中央)、斉藤友美さん(写真右)

同社企画業務課課長の丸谷宏一さんは「あやとりい」による交通安全活動の展開について次のように話す。

「私たちはクルマを通じてお客様と接点を持つている中で、お客様やそのご家族であるお子さんを交通事故から守ることは重要な使命だととらえています。『あやとりい』を活用することで、お子さんが巻き込まれる交通事故を1件でも減らしたいと考えました。これが家庭でお父さんやお母さんとお子さんが交通安全について話すきっかけになり、多くのお子さんの安全意識が高まればいいと思っています。」

1月23日は、ホンダカーズ大分・古国府店で「あやとりい教室」を開催。シヨールーム内のキッズコーナーには13名の子どもが集まった。指導を担当するのは同社企画業務課の足立霧名さん、工藤はるみさん、斉藤友美さん。

まず導入として、「あやとりい」の音当てクイズを始める。足立さんは集まった子どもたちの目線の高さに合わせて、街の交通場面が描かれたワークシートを見せる。「この街の中から、いろいろな音が聞こえてきます。音をよく聞いて、何の音かわかったらみんな元気よく手を上げてください。」CDから様々な音が流れるたびに、子どもたちは手を上げて「救急車!」

特集
子どもへの
交通安全教育

子どもの安全意識を育てるための取組み

「自転車!」「トラック!」と答え、ワークシートに近づいて街のイラストのどこに描かれているか指差す。例えば、トラックがバックする時の音では、足立さんが「トラックは大きくなって後ろがよく見えなから、『ピー、ピー』という音で後ろに下がることを知らせています。トラックのおじさんから、みんなのことが見えない時があるから、この音を聞いたら気をつけてね」とアドバイスを加えた。



「あやとり教室」では交通場面で描かれたワークシートを通じて、子どもとの対話を基に、本来的な交通ルールや安全確認行動を伝える



続いて、車道と歩道が描かれたワークシートを使い、道路のどこを歩けばいいか、子どもたちに伝える。「みんなが歩くところは歩道といえます。歩道では、どこを歩いたらいいかわかりますか?」と尋ねると、「端っこ!」という声が上がった。工藤さんが子どもの一人を指名。その子どもはイラストの歩道の壁側を指差す。「そうです。みんなはクルマから遠くなる、壁のほうを歩くようにしてください」。さらに、「歩いて角(信号

機のない交差点)にきました。ここでは何かすることあるかな?」と、質問を投げかけると、「角で止まって観る」という



「あやとり教室」は各拠点のショールーム内に設けられたキッズコーナーを利用して行われ、保護者も子どもたちの後ろで一緒に学ぶ

子どもに
わかりやすい
指導をめざす

う答えが返ってくる。「角に来た時、先がどうなっているかわかりません。だから、一度止まって、右を観て、左を観て、もう一度右を観る。そして、何も来てないのを確かめてから進みましょう」と、工藤さんが安全確認の基本行動を確認する。この他、信号機のある交差点が描かれたワークシートを使って、歩行者用信号機の色の意味を説明し、「あやとり教室」は終了となった。

日常からの交通安全教育を
継続させるために

ホンダカーズ大分の「あやとり教室」は今回で13回目の開催となる。1回目は本田技研工業(株)安全運転普及本部のスタッフの協力を得たが、2回目以降は足立さん、工藤さん、斉藤さんが行っている。足立さんは「開催の告知をすると毎回多くの親子が参加してくれます。最初は不安もありましたが、お子さんの反応がとても良く、それにともなって保護者の方々にも好評です。既にすべての拠点で1回は開催しており、私をはじめスタッフが意義のある活動だと感じています」という。最も多く指導者役を担当している工藤さんは「実際に自分がやってみて、伝えやすく、親子で学べるプログラムだと思いました」と話す。「ただマニュアル通りに進めるのではなく、参加されているお子さんの年齢に合わせて、変化をつけるなどの工夫をしています」

学校や保護者、地域住民と協力し、子どもへの新たな交通安全教育の枠組みの構築をめざしているのが、(一財)日本自動車研究所(茨城県つくば市・以下、JARI)安全研究部予防安全グループ主任研究員の



大谷亮さんだ。子ども(小学生)への交通安全教育を研究のテーマとした背景を大谷さんは次のように話す。「自動ブレーキをはじめとする先進安全運転支援システムに関する研究も手がけているのですが、こうした便利なシステムを搭載したクルマもドライバーの運転の仕方によっては、その性能を十分に発揮できないことがあります。ドライバーへの効果的な安全運転教育を考えたわけですが、大人になってしまつと人間の態度や行動は固定化してしまい、変えていくのは容易ではありません。そこで、未来のドライバーである子どもの段階から継続的に教育をしていくべきではない

かと考えたわけです」。その第一歩として、JARIはつくば市交通安全教育指導員と協力して、年に1回、近隣の小学校で1・6年生を対象にした交通安全教育を開始したのである(現在の内容は、発達段階に応じて、1・2年生は道路の歩き方、3・4年生は自転車の乗り方、5・6年生は登下校時の低学年の指導をテーマにした小集団討論)。大谷さんらが交通安全教育を行っている中で、課題としたのは継続性だ。「研究データを取得する中で、年1回の交通安全教育による子どもの態度や行動の変化は難しいことがわかりました。いかに日常から継続的な教育を行うか、まず、注目したのが保護者です。保護者が教育担当者となることで、子どもと歩く具体的な交通場面において、子どもの特徴に応じた教育が可能になると期待されます」。大谷さんらは2007年より、つくば洞峰学園つくば市立小野川小学校で毎年6月に行われる親子参加の「家庭教育学級」の機会を利用して、1年生と2年生の学年ごとに45分間の交通安全教育を実施した。保護者が教育担当者の役割を担い、自らの子どもに適切な道路の横断方法について教えるというもので、1年生の保護者はほぼ全員が参加するそうだ。保護者が一定の知識と技量をもって交通安全教育ができるように、大谷さん

(一財)日本自動車研究所安全研究部予防安全グループ主任研究員の

大谷亮さん。専門は交通心理学。著書に「子どものための交通安全教育入門:心理学からのアプローチ」(共著・ナカニシヤ出版)など

特集
子どもへの
交通安全教育

子どもの安全意識を育てるための取組み

らJARIの職員や、つくば市交通安全教育指導員による事前学習を行っている。「開始30分前に集まっていたら、『できることからやっていたら十分』と参加へのハードルを下げるようにしています」。

この交通安全教育の目標は、児童が道路を横断する時、急がずに必ず止まって周囲を確実に確認し、手を上げて横断歩道を渡ることである。訓練では、模擬の横断歩道の近くに駐車車両を置き、見通しを悪くした場所を校庭に設定。そこを普段通り横断してもらおうように児童に促し、保護者がそれを観察。良い点は褒め、不適切だった点を指摘する。この時、児童の意見を聴くことと、答えをいうのではなく、問いかけてもらうことを保護者に徹底させた。児童が主体的に考えて行動できるようにするためである。この後、児童に再度同じ場所を横断してもらい、保護者が児童へのフィードバックを行う。この様子を踏まえ、最後に適切な横断方法について指導員らが解説し終了となる。

「交通安全教育の実施前と後の保護者へのアンケート調査では、『急いで横断することに対する危険性の理解が深まるなど、保護者自身の安全意識の向上がみられました。子どもの交通安全教育に参加することが保護者自身の教育になります。行動が適切に変化する事も期待できます。また、1、2年生の時に参加した保護者の方がその後、3年生以上の交通安全教育にも協力していただけるケースも少なくありません。『自分たちもできる』という意識を持つことで、継続的に参加していただけるようになります」。

このほか、大谷さんらは翌年度に入学を控える子どもを持つ保護者を対象にした同校の入学



小野川小学校での親子参加の「家庭教育学級」

説明会にも足を運んでいる。「出席した保護者に対して、道路の歩き方や安全確認の方法など、入学までに子どもに教えてほしいことをお伝えしています。入学前の段階から、保護者の安全意識を高めることが大切です。これによって入学後に行われる交通安全教育にもスムーズに参加していただくことができます」。

子どもの見守りを
交通安全教育に
つなげる
SANPO活動

次に大谷さんが注目したのは地域住民である。つくば市、茨城県警察、茨城県のパックアップのもと、2014年からは小野川小学校でSANPO活動をスタートさせる（SANPOは「Safety Assistant Network Project in Onogawa」の略）。活動内容は児童の登下校などに合わせて、ボランティアが名札をつけて見守りを行い、危険な場所・子どもの行動、不審者などに気づいたら学校・警察に連絡するというもの。可能であれば、児童に挨拶をしたり、危険な行動に対して指導する。

「地域住民の方々の協力を得ようとする」と高いハードルがあります。お仕事をされている方もいらっしゃいますので、継続性を図る観点から、『できることから』を基本としました」と、大谷さんらは参加する住民の方々の負担にならないように配慮した。「活動する日も一人ひとりに任せています。まずは、活動できる日の児童の登下校時間帯に、散歩のついでに見回りをお願いしています。さらに可能であれば、『小学校での教育参加』『日常の立哨指導』のどちらか（もしくは両方）に協力していただきます」。



小野川小学校区でのSANPO活動の様子

全確保についても話題にのぼり、ボランティアの指摘は道路環境の改善にもつなげていくことが期待できるという。

「また、子どもたちに指導する立場になることで、ボランティアの方々（高齢者）も道路横断時に周囲をしっかり確認しなければいけないと安全意識も向上していることを確認しました。活動の副次的な効果として、高齢者の交通事故防止につながる可能性もあると思います」。

ボランティアの中には、前述の小野川小学校における「家庭教育学級」にも協力している方もいる。「保護者の方々に、ボランティアの方々を手伝っているのを見守ることで、地域社会全体で子どもを守るという理念を感じていただけるのではないのでしょうか。SANPO活動は高齢者が中心なので、継続していくためには次世代への伝承という課題があります。将来、保護者の方々の中からSANPO活動への参加者が生まれることで、うまく世代交代を進めていくことが理想です。小野川小学校において継続的な活動の可能性と要件、児童への教育手法について十分に検討した上で、他の地域への普及も考えていきたい」と、大谷さんは今後を見据えている。

活動を始めるにあたっては、大谷さんが正しい道路横断の方法や子どもとの接し方をボランティアに説明した。SANPO活動に協力しているボランティアは現在、高齢者を中心に30数名。最初は見守ることからスタートし、今では道路への飛び出しといった不安全行動があれば、児童に注意を促している。また、こうした方々の情報交換の場として、新たに交通安全対策連絡協議会を小野川小学校内に設置。年3回、活動にあたっての課題の共有や、その解決方法を議論している。

「私たちのやり方を一方的に押しつけるのではなく、実際に子どもの行動を観察している方々の声を活動に反映できるようにしています。1年目は私たちからお願いで参加していただく形でしたが、2年目に入ると自主的に参加していただけるようになりました。継続することで、この活動の意義を理解し、自分たちが活動を支えているという実感がわいてきているからだと思えます。交通安全対策連絡協議会では児童の行動面だけでなく、通学路の危険箇所やそこでの安



SANPO活動に参加するボランティアの情報交換の場となっている交通安全対策連絡協議会

Hondaによる
幼児向けの
新たなプログラム
開発

現在、Hondaは幼児向けの新たな教育プログラムの開発を進めている。「あやとりい」で交通ルールを習得した子どもたちの次のステップとして位置づけ、映像等を活用して危険予測能力を身につけてもらうことを目的としている。昨年12月4日には、Honda青山ビル（東京都港区）で「交通安全教育プログラム進捗報告会」を開催し、全国各地の地域指導者から開発中のプログラムに対する意見や要望をヒアリングした。地域指導者からのアドバイスをもとに、使いやすさを向上させるための検討を重ねているところだ。4月以降にプログラムの検証を実施することを目標に完成をめざしている。



昨年12月に開催された「交通安全教育プログラム進捗報告会」

※あやとりい= Honda が三重県鈴鹿市と協力して開発した交通安全教育プログラム。幼児～小学校低学年対象の「あやとりい ひよこ編」、小学3～4年生対象の「あやとりい」、幼児～小学校高学年対象の「あやとりい 自転車教室」、高齢の歩行者・自転車利用者対象の「あやとりい 長寿編」がある。あやとりいは「あんぜんを やさしく ときあかりかいて いただく」の略。詳細は以下ホームページを参照。
http://www.honda.co.jp/safetyinfo/kyt/ayatorii/